詞の玉緒「一つのまし」について

星野佳之

はじめに

『詞の玉緒』（注1）の「まし」に関する記述の内、「一つのまし」という項目は、「つねのまし」と「いささか意かは」る「まし」についての説明である。

○一つのまし

見る人もなき山ざとのさくら花外のちりなん後ぞさかまし

【古今・春上・八八】

さくらばな見るにもかなし中々にことしの春はさかずぞあらまし

【千載・哀傷・五五二】

花見んとうゑけん人もなき宿のさくらはこぞの春ぞさかまし

【新古今・哀傷・七六三】

さる澤の池もつらしなわぎもこが玉藻かづかば水ぞひなまし

【大和物語】

風をだにまちてぞ花の散りなまし心づからにうつろふがうさ

【後撰・春下・八八】

此のましはみな上にぞもじをおけり。つねのましながら。いさゝか意かはりて。一つの格也。その意は〳〵かやうにこそ有べきことなれといふ意にて。さやうにあらせまほしくねがふこゝろある也。始めの歌にていはば。〳〵外のちりなん後にこそさくべき事なれという意にて。外のちりたらん後にさかせまほしく思ふ意なり。いづれも皆これになずらへて心得べし。

又

おもひけん人をぞともに思はましまさしやむくひなかりけりやは

此歌はつねのましの意にても聞え。又こゝの格としても聞ゆるうちに。こゝの格にちかきなり。

「つねのまし」を直截に説明した部分はないが、現代の我々の言う「反実仮想」のこと、そしてこれと少し違うという「まし」は、「願望」の意味が表されているというのであろう。確かに證歌の古今集の歌を、「外の桜が散った後に咲いてほしかった」というふうに願望を含めて理解することは自然である。

しかし、ここで問題となるのは、「此ましは、みな上にぞもじをお

けり」とあって、係助詞「ぞ」との関連が示唆されていることである。この記述を読むと、「ぞ」と「まし」が呼応している例は皆「願望」の「まし」であると述べられているように見えるが、それは記述として妥当なのであろうか。宣長がここで何を言おうとしているのか、まずは能う限り『玉緒』の記述を整合させるという立場に立って、考えてみたい。

一

まず、證歌にも挙がっている例1を見てみる。

1　親のわざしに寺にまうで来たりけるを聞きつけて、「もろともにまうでまし物を」と、人の言ひければ

わび人の袂に君がうつりせば藤の花とぞ色は見えまし

返し

よそにおる袖だにひちし藤衣涙に花も見えずぞあらまし

【後撰（注2）・慶賀哀傷・一四一八】

この返歌は「ぞ」と「まし」が呼応している例であるが、積極的に願望を表していると読めるだろうか。この贈答は、まず贈歌が古今集の「みな人は花の衣になりぬなり苔の袂のかわきだにせよ」（哀傷・八四七）を踏まえて、喪服でない衣を「花の衣」とし、それが自分の涙に濡れる喪服（藤衣）に映ったなら、「藤の花」に見えたことだろうと言うものである（新日本古典文学大系脚注）。対して葬儀に参列しなかった人の返しは、よそにいても袖を濡らしたくらいなのだから、参列したところでその袖に映った花は見えなかったであろうというものである（注3）。この例を、果たして『玉緒』のいうように、「さやうにあらせまほしくねがふこゝろ」を含めて理解すべきであろうか。この場合には、「物がよく見えないほど涙にくれる」という事態が仮想されているわけだが、この贈答で大泣きすることを積極的に期待する事情は見出せないものと思う。この歌は、

2　もと住み侍ける家をものへまかり侍りけるに過ぐとて、松の梢の見え侍りければよめる

年をへて見し人もなきふるさとにかはらぬ松ぞあるじならまし

【後拾遺・雑四・一九四五】

左衛門督の北方

と共に、「まし」の別の項目、即ち「ば」と「まし」が呼応しない稀な例として證歌になっている。例2も「ぞ」と「まし」が呼応しているから、「さやうにあらせまほしくねがふこゝろ」があるか否かという問題の対象となるであろう。この二つの證歌の後に、「かやうに上にばもじなきは。いと〳〵まれ也。但しや　何などとかゝりたるには。はのなきも多し。又ましを　まし物をなどと留まれるにも。上にばのなきもおほし。」という注記があるが、この条件によっても猶残る「いと〳〵　まれ」な例には、

3　思寝の夢といひてもやみなまし中〳〵何に有と知りけん

【後撰・恋四・八七二】

4　内外なく馴れもしなまし玉簾誰年月を隔て初めけん

【拾遺・恋四・八九八】

5　思ひかねうちぬるよゐもありなまし吹きだにすさべ庭の松風

【新古今・恋四・一三〇四】

のような例が見られる。それでも例1・2のように「ぞ」と呼応する例を挙げていることを考えれば（注4）、そこに宣長の意図を見るべきなのかも知れない。

ここで1と2を更に見てみると、両者は性格を異にするものであるように思われる。まず1について「願望」が認めにくいことは先述の通りだが、2は詠者・左衛門督の北方が夫と死別していること（新日本古典文学大系脚注）を考えに入れれば、「不変の松が家の主だったらよかった」というように理解する余地があるだろう。また、「願望」の適否の外に、この項が「ば」の有無に関するものである事に着目して両者を見るに、まず1の返歌には、「もし葬儀に参列していたら」というような前提があるのであって、それは贈歌が詠まれるまでの経緯で既に明らかなものとして踏まえられている。この前提を言語化された形で想定すれば、「もろともにまうでましかば」のように考え得るのであって、明白な文脈のもとに「ばもじ」を欠くのだと説明することは、十分可能だと思うのである。

対して2には、そのような「ば」の仮定条件節を想定することが困難である。そもそも、次のような「―ば―まし」呼応の例に於いて、

6　鶯に身をあひかへば散るまでも我が物にして花は見てまし

【後撰・春下・一〇一】

「鶯に身をあひかふ」というのが既に反実の事態を設定している。（例1でこれにあたるのが、先述の明白な文脈である。）そしてこの反実事態に整合する事態として、更に「散るまでも」以下のことが仮想されているのであり（例1の返歌全体がこれに当たる。）、両者を「ば」が関係付けていると考えることができよう。例1・6がこのように二つの反実事態の結び付けといった構造を持つのに対して、例2は単に反実事態を設定しているだけだから、そもそも「ば」の現れようがないだろう。つまり、「ばもじ」を欠く異例として、あってもよい「ばもじ」が省かれていると見得る例と、そもそもあるはずがないから「ばもじ」が現れない例という具合に、異なる説明の可能な二者が並んでいるわけである。これを宣長の意図と考えれば、効果的な證歌のあげ方と評することができるが、その分、「ばもじ」には関わらない「ぞ」の有無の問題は影が薄くならざるを得ないのではないだろうか。

結局、例1・2が「一つのまし」の記述の対象となるのかどうかは、不明といわざるを得ない。しかし、宣長の意図がどうであれ、「願望」の「まし」が「皆上にぞもじをおけり」というのであれば、例1・2がこれで説明できない限りは妥当性を欠くということになるだろう。例2が先述のような理解で「願望」の解釈が可能だとしたら、問題として残るのは、やはり「願望」が不自然な例1である。先の、「ばも

じの省略と見得る」という考察は、この「願望」の問題とは無関係に為されたものであるが、実は微妙な関わりを持つものと思われる。

二

そもそも、「ぞもじをおけり」という注記は、「ぞ」があるということなのか、或いは「ぞ」のみがあるということなのだろうか。もちろん「ぞ」のみとはいっても、排除の対象は自ずから限定される。『玉緒』が「まし」と呼応するものとして言及しているのは、既出の「ば」「ぞ」「疑問語」以外には「こそ」のみであるから（注5）、少なくともこれらと共に「ぞ」が現れて「まし」と呼応している例が、「一つのまし」の対象になるかどうかということは考えられてよいだろう。現に、「まし」の八代集の用例の中で「ぞ」が呼応している例は余り多くはないが、その殆どは

7　君まさばまづぞ折らまし桜花風のたよりに聞くぞ悲しき
【拾遺・哀傷・一二七八】

8　夜ならば月とぞ見まし我がやどの庭白妙に降り積もる雪
【後撰・冬・四九六】

の如く、「ば」と共に現れるのである。また、例7は、「故人がいたら花をまず折って差し上げたのに」という背景に、そのような状況を希求する心情を読むことが可能である。一方例8は、「月と見たいのに、夜ではないからそう見えない」といった現実を想定するのは困難だから、「願望」で理解する必要性は極めて薄い。そして「―ば―ぞ―まし」呼応の用例は例7のような「願望」と読んでよい例に特に偏っているということはないから、例8の少なからぬ類例を考慮に入れることは、「一つのまし」の記述の妥当性に、更なる疑問を生じさせる事につながるのである。

普通であれば、「ば」と「ぞ」が共に「まし」と呼応する例は、「一つのまし」の項目の対象になると判断すべきところである。というのは、

9　さる澤の池もつらしなわぎもこが玉藻かづかば水ぞひなまし
【大和物語】

というような例が、他ならぬ「一つのまし」の項に挙がっているからである。しかし、例9の「―ば―ぞ―まし」は、例7・8のそれと同じものと考えられるべきであろうか。これについて考えるには、もう一度「―ば―まし」という形の用例について考える必要があるものと思う。

三

前掲の例6について、この人は鶯のように花を見たかったのだと受け取らない方が不自然である。このような例は類例を容易に挙げることができる。

10　世中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし

【古今・春上・五三】

11　思つゝ寝ればや人の見えつらむ夢としりせば覚めざらましを

【古今・恋二・五五二】

10・11とも、「春の心がのどかであること」「夢を見続けて目覚めなかった状況」が現実であったらと望む例と考えることができる。一方で、

12　君こふる涙しなくは唐衣むねのあたりは色もえなまし

【古今・恋二・五七二】

13　是貞親王の家歌合に

よみ人しらず

秋の月常にかく照る物ならば闇にふる身はまじらざらまし

【後撰・秋中・三二四】

12の歌では、胸の辺りをことさらに紅に染めたいわけではないだろうし、13も、闇の中で生きる身が光の当たる場所に混じれたことは、寧ろ喜ばしく思っているに違いない。それぞれ、「色もゆ」「まじらず」という事態を望んでいるとは思われないのである。6・10・11が「願望」の例となり、12・13がそうならないのは、前者が「我が物として花を見られない」「春の心がのどかでない」「目覚めてしまった」といった現実に対して否定的であり、後者はそうでないという違いによると理解できる。結局6・10・11・12・13は、反実事態として共通し、そういった仮想をする動機が、6・10・11の場合には現実への不満と理想的な非現実事態への希求であるだけだ、ということである。次の

14　東よりある男のまかり上りて、さき〴〵物言ひ侍ける女のもとにまかりたりけるに、いかで急ぎ上りつるぞなど言ひ侍ければ

よみ人知らず

をろかにも思はましかば東路の伏屋といひし野辺に寝なまし

【拾遺集・巻十八・雑賀・一一九八】

も、特に「願望」とは考えられない例であるが、何故このような反実仮想をするかといえば、自分の心情を訴えたいからである。「疎かに思っているのなら、伏屋あたりで一眠りして今はまだ着いていないだろうが、現実にはこうしてやって来ているではないか」というのである。しかし、そういった心情の主張は、動機としてこの表現を生み出すものではあっても、直接表現されているものではない。ここで表面的に表されているのは、「自分が疎かに思っていた場合」という反実的設定と、それに整合する更なる反実事態である。「Aという事が仮にあったら、Bという事態が整合する」という関係である。そして、A・Bが整合するという結び付きが、先に例6について考えた如く、専ら「ば」という接続助詞によってなされるとしたら、「まし」は単にある反実事態を表しているに過ぎまい。そして、そうであるが故に、

15　みてぐらにならまし物を皇神の御手にとられてなづさはましを

【拾遺集・巻十・神楽歌・五七八】

のような、特に何とも整合しているとは思われない例も、「まし」で表現され得るのだと考えられるのである。

更に、次のような例について見てみたい。

16　（題知らず）　（よみ人知らず）

海も浅し山もほどなし我が恋を何によそへて君に言はまし

【拾遺集・巻十二・恋二・六六〇】

17　兼覧王に、初めて物語りして、別れける時に、よめる　躬恒

わかるれどうれしくもあるか今宵よりあひ見ぬさきに何を恋ひまし

【古今集・巻八・離別歌・三九九】

「恋をよそへていふ」という事態が成立するためには、よそへられる物を見つけなければならず、それを追求するのが「何に」という言葉である。しかし、16の人の恋は大きすぎて譬えようがない。不可能であるから「まし」の文で表されているのであって、この追求の答えが出たときには、「恋をよそへていふ」事は現実に可能だから、「まし」では表されなくなるであろう。このように考えることは、

18　あな恋しゆきてや見まし津の国の今も有てふ浦の初島

【後撰集・恋三・七四二】

のように、その気になればいつでも実現可能と思える事態について「まし」を用いて逡巡するような例（こういう例は多い。）を見ると、適切ではないのではないかと思われるかも知れない。しかしむしろ、18では「不可能」と判断する理由が、「遠い」とか「時間がない」とかいった極些細な事を想定してよいくらい小さなことであるが、それでも事態の実現可能性を認めることに抵抗を感じている点では、例15のように、人が幣帛になるというあり得ない例と同質であると見た方が、「まし」の用例全般の内部の整合が取りやすいと思う。16も17も、対象が見あたらない故に成立不可能な事態を、「まし」が表していると考えられるわけであるが、これらも、そのような反実事態を述べるのは、相手への恋情の大きさや、交際が始まった喜びを述べるためである。

つまり、「―ば―まし」と呼応する例もしない例も、文が表面上意味する反実仮想と、その反実事態を仮想する動機との間に距離のあることは同じであると考えられる。いうなれば動機は「まし」の文の背景であり、その背景が常に「願望」である必要もない。「願望」は、あり得る「まし」の背景の一つに過ぎない。

四

ただ、こうして全ての「まし」に同質性を認めながらも、「―ば―まし」と呼応するものとそうでないものとの間に、受け取り方の差があるということも、一方では言い得る。「―ば―まし」の構文の例で「願望」を背景として読みとれるものでも、「まし」を口語訳として「…たい」と置き換えることは不自然である。例えば例6の歌を、「鶯に身を変えたら、我が物にして花を見たい」という風に口語訳するのは極めて据わりが悪い。これは文章の裏として、「鶯に身を変え

ない場合には、我が物として花を見たくない」を意味してしまうだろう。「…たい」という口語訳で何故このような食い違いが起こるのかと言えば、背景の「願望」を、下の句だけに投影するからである。本当は、既述の如く、背景の「願望」をもとに、上の句とて希求される反実事態であって、下の句はその上の句の範囲内に収まる反実事態である。「ば」という条件節は、下の句の事態が成立する為の前提を設定しているわけだが、この下の句の「まし」だけを「願望」として「…たい」と訳せば、その「願望」が成立する条件として「ば」（の口語訳）が働いてしまうわけである。当然それは不自然だから、誰も6の歌を「花を見たい」とは訳さず、「花を見るだろうに」といった具合に理解するはずである。背景の「願望」が、背景の位置に留められるわけである。

しかし、「―ば」と呼応しない15のような例には、そのような障碍がない。「幣帛になりたいものだが」と訳して理解してもそれは自然な文であるし、背景をも同時に取り込んで解釈したことになるから、歌の解釈としては寧ろ適切なくらいである。先に「受け取り方に差がある」と言ったのは、こう言う事であった。以上の考察は、我々の現代語を通じての受け取り方からのアプローチであるが、これを、背景が背景の位置に留まって理解されやすいか否かの違い、というように理解し直せば、これは古代語の問題と考えてよいはずであるから、宣長もこの事を認識した可能性は十分にあるであろう。

五

以上を踏まえ、ここで大きく戻って、「一つのまし」の例9の問題について考える。「一つのまし」の項の中で唯一、「ぞ」のみならず「ば」と呼応する例として9があるために、「―ば―ぞ―まし」で「願望」とは考えられない例8のような例を、ここの記述の反例として結び付ける役割を果たしかねないということが問題であった。宣長は、「大和物語」から採例して、和歌集から證歌を引用するという原則を破ってまで、自説に不利に働くような挙例をしてみせたのであろうか。極めて不審と言える。この問題は、今まで「―ば―まし」と呼んできたものを整理することで、解決可能だと思うのである。

再々例6で説明すると、この歌の背景の「願望」は、まず「鶯に身をあひかへば」という条件を設定するが、これ自体が反実仮想であった。この人はまず「鶯であったらいいなあ」と言い、「そうなったら花を我がものと見られるのに」というのである。対して「大和物語」の證歌は、「采女が玉藻をかづく」ということを望むのでも、「入水したらいいなあ、そうしたら池の水が乾いてほしいなあ」というのでもない。池の水が乾いてほしいのは采女が入水した時なのであって、この条件節は、「願望」が生まれるための条件なのである。実際、采女は入水したのであって、これは反実事態ではない。このような条件が「未然形＋ば」で表される事自体は、改めて考えるに特殊の感があるし、『玉緒』の「ば」の項でも何も言及されていないというのが多

いに気になるところではあるが、それでもなお、例6等の「ば」と異なることは明かであろう。先ほどのアプローチを引き合いに出して、「采女が入水したら、池の水は乾いてほしかった」という口語訳も自然である。このような「―ば―まし」は極めて稀で、管見の限りでは八代集・「源氏物語」にも見出せない（注6）から、「大和物語」からの挙例も頷ける。

つまり、「一つのまし」の項には、例6のような、「まし」の例として一般的な「―ば―まし」の例は挙がっておらず、ごく稀な「―ば―まし」の例と、「―ば」を持たない「―ぞ―まし」の例だけがあるということになる。例9をもとに、例8のような反例をこの項に関連づける必要はなくなったわけで、寧ろ反実事態の「―ば」とは呼応しない例のみを挙げていることから、「上にぞもじをおけり」とは、「ぞのみと呼応する」と解釈する道が開けることになる。

六

こうして例8とその類例が当面の考察対象から除外されるから、反例の数は激減はする。しかし、依然例1は処理できぬまま残っている。そもそも、今まで宣長の説をなるべく整合させようと努めてきた過程で、「一つのまし」の記述の対象から外してきた諸例の中にも、「願望」を読み得る例があるという事は、仮に「―ぞ―まし」が「願望」であったところで、それが特に立てるに足る説明であるかの疑義が生じよう。

このような観点から、今まで簡単に「願望」と読んできた事柄を、改めて「一つのまし」の記述に照らして考えて見る際に注目されるのは、「さやうにあらせまほしくねがふこゝろ」という言い方である。即ち、「あらせる」という他動的表現に着目して用例を見渡すと、いずれも自分自身に対する「願望」というよりは、他者にこうあってほしいという「願望」と理解できる例ばかりである（注7）。『玉緒』に挙げられていないものも含めた八代集中の「―ぞ―まし」の例は、「一つのまし」の項の六例と、別のところで證歌となっている例1・2の他、

19　（題知らず）　（よみ人知らず）

あさましや見しかとだにも思はぬに変らぬ顔ぞ心ならまし

【拾遺集・巻十五・恋五・九四九】

20　一条摂政かくれはべりてのち少将よしたか、こむませて侍ける七夜にむかしをおもひいでてよみ侍ける　法住寺太政大臣

ちぢにつけおもひぞいづるむかしをばのどけかれともきみぞいはまし

【後拾遺・雑五・一一〇五】

21　（題しらず）

の二例を合わせた十例のみであるが、「他動的願望」の例が殆どである。しかし、こう考えてなお、

深養父

思ひけむ人をぞともに思はまし正しや報ひなかりけりやは

【古今集・巻十九・雑体・誹諧歌・一〇四二】

の例は、自分に対しての反実仮想と見ざるを得ないのに、「一つのまし」の項で「此歌はつねのましの意にても聞え、又こゝの格としても聞ゆる」と迷った挙げ句に、「こゝの格にちかきなり」と判断していることにより、「他者への願望」という打開策は断念せざるを得ないように思う。

また、ここで無理をして先に進んだところで、なおも例1が問題となる。この例は、「花も見えずぞあらまし」という「他者への反実仮想」とは見得るが、「ねがふこゝろ」は読めないと言う先からの問題点が、やはり障碍となるのである。

また、「―ば―ぞ―まし」の例16・17は必ずしも「他者への反実仮想」ではないし、「ぞ」単独の例でも、

22　題しらず　　読人しらず

百千鳥さへづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふりゆく

【古今集・春上・二八】

のように、一人称に用いられる例が少なくない中で、「まし」とだけ呼応したときのみ、「他動的」に用いられるようになることへの合理的説明が今の私には思い付かない以上、この説明方法を試みることは、やはり諦めるしかない。

七

結局ここに来て、「一つのまし」の項の記述を、積極的に整合させる方法はなくなってしまったわけで、この結果から本稿では、「一つのまし」の記述の妥当性に対して、否定的な結論を導かざるを得ない。そして、ここで今までの「なるべく整合させる」という立場を離れて、消極的把握を許すことにすると、今までの考察より一つの解釈が浮かび上がってくる。

即ち、「ぞをおけり」を、「ぞのみと呼応する」と解釈することの妥当性はあると考えたわけだが、この条件で排除されるのは、先に先に着目した「―ば―ぞ―まし」の例だけでなく、同時に「―ば―まし」の例全ても除かれることになり、量としてはこれが最も大きな対象となる。そしてその「―ば―まし」の例は、仮定条件節で既に反実事態が設定されているので、「―まし」の部分が、単に条件と整合するだけであることも述べた。逆に「ば」と呼応しない「まし」の方が背景（の希望）が前面化しやすいことも記述の通りであって、宣長は、「ば」と呼応しない事による用例上の偏り（即ち「願望」の例の多さ）を、「ぞ」の問題であると誤認したのではないか。こう考えるとき、「いと〳〵まれ」として扱われるべきと私が挙げた例3・4・5についても事情は同じで、特に例3など、「思寝の夢とでも言って終わりにしてほしかった」というように、「他動的願望」と言うよう

に解釈ができるにも拘わらず「ぞ」とは呼応していない例があるのだから、これらが「一つのまし」の項目の対象となって「皆上にもじをおけり」と説明されたとしても、特段の違いが生じるとは考えられない。「一つのまし」は「ぞ」問題であるという宣長の捉え方は、どうしても肯定し難いもののように思われる。むしろこの「一つのまし」は、大きな観点としては、二つの反実事態が表現される場合と、一つしか表現されない場合の違いについて意識されている点、そして小さな観点としては、例9のような「―ば―まし」が一般の「―ば―まし」とは異なることに気づいている点、つまり、「ぞ」の問題などよりも、反実仮想に於ける条件節の問題に関して、より多くの示唆に富むものであると受け取られるのである。

注1　以下、『詞の玉緒』の本文は、『本居宣長全集第五巻』（筑摩書房）による。但し、私に体裁を改めたところがある。

2　以下、八代集から引用する本文は、それぞれ新日本古典文学大系のものによる。また、「大和物語」は古典文学全集のものによった。

3　本稿では、宣長のあげなかった詞書・贈歌等を踏まえて考察しているが、特にこの例1など、当該歌だけで歌意を理解するのは極めて困難であると思う。出典の明記はこのような事情を考えてのことでもあると理解する。

4　現代の我々の見ている八代集と宣長の見たそれとがどの程度異なるものなのか分からない分、本稿の論の妥当性が低くなることを自覚した上で以下論を進める。なお、「新編国歌大観」によれば、金葉集初度本にも次のような例がある。

月かげにはなみる夜はのうきくもは風のつらさにおとらざらまし（春・八四）

5　「又こその結びにましかといへる有。」

6　「源氏物語」についても、注4と同様。

7　栗田岳氏の指摘による。

〔付記〕　大坪併治氏、吉田則夫氏からの指摘を検討した結果、論考の妥当を欠く部分を一部削除することができた。

（ほしの　よしゆき／本学助手）